



巻頭言

水際（みずぎわ）への思い

財団法人 日本植物調節剤研究協会 理事 片岡 一男
東 海 支 部 長

草刈りを終えた畦道が薄緑に映え、植田が日
日青み野山にしたがえる景色は、日本の風景で
あり、心の息まる田園風景である。今年も豊作
であることを自然に祈りたくなる。

畦道を歩いて水際（畦際？）が多様であるこ
とに改めて気がつく。昔ながらの畦塗りのして
あるもの、いろいろな塩ビのシート、コンクリ
ート、畦を削っただけ、畦と田面の区別がつか
ないものなど、実に様々である。

かつては、田んぼの2～3辺は、畦塗りされ
水際が判然としていた。古老に、畦塗をきれい
にする方法と畦草刈りの要領を教えてもらった
ことを思い出しながら、感慨深く畦と水際を眺
めて歩いた。

今は、シートで遮るか、草を刈っただけの場
合が多く、かつての畦がきれいに塗られ水際が
判然とする田んぼは極めて稀にしか目に入らな
くなった。

その背景には、水田の基盤整備が進み、一筆
の面積が大きくなり、畦が大きく丈夫になった
こと、農業用水の整備が進み、昔ほど用水不足
の心配をしなくてもよくなったことなどがある。
そして、大変な重労働であった畦塗り作業から
の開放が実現するようになった。反面、いくつ
かの課題をもたらしている。①畦際から水田の
中へ雑草が侵入してくること。②畦からの漏水
で田面への湛水が不十分になることなどが大き
な問題である。

水田除草剤は、24-Dの実用以来、長い間畦
塗りされて水際のはっきりした水田を対象に普
及し開発が行われてきた。したがって、水生雑
草が防除の主対象で、湿生雑草や乾生雑草は防
除の対象外と考えられていたとも言える。とこ

ろが、今はイボクサ・タデ類・キシュウスズメ
ノヒエ・アシカキ・タカサブロウ・クサネム・
センダングサなど水生雑草でない雑草の同時防
除が求められるように変わってきた。一つの除
草剤には過酷と思える要望であるが、特性の異
なる剤を混合することにより現場の要望に応え
ようと努力しているのが現状である。

また、除草剤の散布作業の省力化・簡便化の
要求に応じて、フロアブル化・少量化そしてジ
ャンボ剤などが開発され、実用普及の段階に至
ろうとしている。除草効果の安定向上の面から
水田の水管理は以前よりも厳しさが増してきて
いる。

水と雑草の関係については、先輩が多くの研
究成果を残し、水の持つ抑草効果についても種
々示唆されている。

良質米の安定生産、コンバイン収穫の効率向
上のための間断灌漑、中干しなどの必要性を否
定するつもりはないが、湛水による抑草効果、
除草剤の効果安定向上効果をもっと認識すべき
ではなからうか。

畦畔雑草の除草剤の開発、防除体系の確立、
水田除草剤の対象雑草の拡大などの課題を克服
する努力とともに、現状の水田における水管理
調節技術を体系化できないものか。

聖域といわれた日本のコメが、ミニマムアク
セスの名で、水際作戦を突破された現状で、か
つてのようなコメ生産への思い入れを呼び戻す
ことは至難であろうが、精緻に造成・整備され
たわが国水田の稲作技術では、物（水や除草剤
など）を大切に、かつ有効に利活用するための
十分な心配りを求めたい。